Transcultural Studies

Newsletter

№ 1

Spring　2018

◊ ニューズレター刊行に寄せて　高屋　亜希
〈教員エッセイ〉中国の大学生　吉原　浩人
〈教員エッセイ〉よくある質問　森　由利亜
〈留学体験記〉University College Dublin　渡邊ちひろ

JCulP 第 1 期生進級！

Creative Works Inspired by Classical Japanese Literature
Shoko Kurokawa
Risa Tomioka
Kana Hozoji
Siwei Mirabelle Long
Kanon Kimura

Extracurricular & Volunteer Activities
Risa Tomioka
JeongHoon Lee

Seminar Excursions
Nanako Terada
Saki Matsumoto

◊ 論系室だより

多元文化論系 ニューズレター

第一号

早稲田大学多元文化学会
二〇一八年度春期大会・総会・学生研究発表会

七月七日（土）

早稲田大学戸山キャンパス
三六号館三階三八二教室（来聴歓迎）

第Ⅰ部　総会　12:15～12:45

第Ⅱ部　学生研究発表会　13:15～15:45

異文化受容論ゼミ
ヨーロッパ文化論ゼミ
言語・文化・英語教育ゼミ
ユーラシア文化論ゼミ
漢字・漢文文化ゼミ
現代中国文化論ゼミ
思想文化論ゼミ

第Ⅲ部　大会シンポジウム　16:00～18:00

「ルイス・フロイスの時代と東アジア」

伊川健二（早稲田大学文学学術院・教授）
「フロイス史料研究事始」

小澤奈那（早稲田大学文学研究科・修士課程）
「大友親家の受洗に関する一考察」

岡本真（東京大学史料編纂所・助教）
「フロイス『日本史』の史料的価値
—天文・永禄年間の事例を中心に—」

シンポジウム報告概要については
裏面を参照してください

懇親会　18:10～
場所：31号館2階208教室

問合せ先
多元文化論系室33号館906号室
03 (5286) 2979
sdc.admin2007@gmail.com

ニューズレター刊行に寄せて

高屋　亜希

文化構想学部に 1 期生が入学したのが 2007 年 4 月、2 年に進級した彼らを多元文化論系に迎えたのが 2008 年 4 月のことです。それから 10 年後の今年、多元文化論系では新たにニューズレターを刊行することになりました。

これまでも多元文化学会が年 1 回刊行する『多元文化』という雑誌がありました。こちらは学術雑誌であり、学生が気軽に手に取って読むものではありませんでした。また多元文化学会ではゼミによる研究発表の機会を設けていますが、発表者以外の参加者は概して少なく、残念ながらゼミの垣根を越えて論系全体が集まって議論する場になっているとは言えません。学生たちは同じゼミの仲間がどういう論文に取り組んでいるかは意識しているでしょう。しかし、論系全体でともに学ぶことを意識する機会は十分ではなかったかもしれません。

ニューズレターは年 2 回刊行し、多元文化論系の教員のエッセイの他、在学生による留学体験記、合宿参加報告などを掲載する予定です。学生たちが等身大の学生生活や率直な感想を発信する場にもなるでしょう。これを読んだ学生たちがお互いの存在に興味を持ち、論系全体を学びの場としてとらえる意識が生まれ、積極的に関わりを持つきっかけになればと考えています。

現在の姿しか知らない人は驚くかもしれませんが、新設当初の多元文化論系は教員数が 20 名以上いる一方、10 ゼミしか設置されていなかったため、複数教員で 1 つのゼミを運営するという形がかなりありました。私自身もアジア文化論ゼミを教員 4 名で担当していた時期があります。他の専門分野の先生方と 1 つのゼミを運営することに難しさはありましたが、諸先生方の異なる視点に触れる機会は私にとっても新鮮な体験でした。多元文化論系という場で学ぶことの意義を考える時、かつて試行錯誤したこうした体験の数々が脳裏をよぎることがあります。

この論系に集った仲間はそれぞれ何を見て、何を考えているのでしょうか。異なる背景を持つ仲間と出会い、つきあうことは、思いがけない視点や刺激をもたらしてくれるに違いありません。そこから新しい多元文化論系の姿が生まれることを期待しています。　（多元文化論系運営主任）

中国の大学生

吉原　浩人

2018 年度早稲田大学特別研究期間取得により、3 月上旬から中国杭州市の浙江工商大学東亜研究院に客員教授として滞在しています。9 月からは広州市の広東外語外貿大学東方語言文化学院、来年 3 月には天津市の南開大学外国語学院に移動する予定です。

私は、10 年前に初めて中国の大学で教壇に立って以来、毎年各地の大学で集中講義や単発の講演に招かれており、今回の滞在でも、すでに四川外国語大学（重慶市）・湖州師範学院・清華大学（北京市）・南京大学を訪れました。また 5 月末には、中華全国日本語スピーチコンテストの華東地区（上海・江西・江蘇・浙江）代表決定戦に、唯一の日本人審査員になるという、得難い経験もしました。各大学の講義や講演後には、私から希望して、学生たちとの懇談会や食事会を設けることが多く、これらの授業や対話の経験から、中国の学生気質について、紹介していきたいと思います。

中国で授業を行ってまず感じるのは、学生の視線の熱さです。学生たちは、授業中は教師の顔をじっと見つめて、一挙手一投足に注目しています。学生たちが熱心に聴いてくれるので、必然的に手抜き授業などはできません。学生がひたむきだと、こちらも乗りが良くなります。先日女子学生に、「先生、きゃあ、今日の授業、面白かったぁ」と拍手された時には、日本で経験したことがないことだったので、思わず涙が出そうになりました。

授業や講演の後の質疑応答も活発です。しかし、講演の内容に関係なく、「先生は、日本のどのアニメが好きですか」などと聞いてくることもあるので、油断はできません。最近では、『你的名字。』（『君の名は。』）や、『妖猫伝』（『空海―KU-KAI―美しき王妃の謎』）は、ほぼ全員が見ています。

中国の学生は、どこの地方でも、ほんとうに優秀です。全寮制なので、授業の欠席者はほとんどいません。どうしても欠席しなければならない用事や病気の時には、事前に届け出なければなりません。学生も教師も、授業 5 分前には教室に来ており、大学によっては自動的に鍵がかかってしまう教室もあります。1 年生は、朝 7 時半から教室での自主学習が義務づけられており、夜も門限の 11 時まで、図書館や空き教室で勉強しています。寮は、一般的に 4 人部屋で机もないので、集中して勉強できないからです。しかし、勉強してばかりというわけでもなく、週末には広場での野外コンサートを楽しんだり、

土日にはハイキングに出かけたりします。恋愛も、盛んにしています。飲み会にもよく誘われますが、こちらの学生は教員にご馳走してくれるので、こちらもお礼の食事に誘わなければなりません。学生と教員の距離が近く、先生方も面倒見がいいので、みな充実した学生生活を送っています。

中国の学生は、小学 3 年生で唐詩三百首を暗誦させられるなど、子どもの頃から徹底的な暗記教育を受けています。このような教育は、語学には最適なので、大学生であれば、英語は全員が問題なく会話することができます。日本語は、習い始めてから 1 年半ほどで、不自由なくなるので、2 年後期の集中講義では、早稲田の 3、4 年生レベルの日本宗教史の授業も、大半が理解することができます。もっとも、固有名詞などは難しいので、振り仮名付のフルテキストを配布しています。このように、教師にとっては、まことに教え甲斐がある学生たちなので、毎日を楽しく過ごしています。

しかし、良いことばかりではありません。最大の問題は、教師の指示を忠実になぞりながら成長してきたため、自分の頭で物事を考える習慣のない学生が多いことです。日本語科の学生は、卒業論文・修士論文は、日本語で書くのですが（博士論文は他大学教員の審査が入るので中国語）、テーマを選ぶ際に自分で決められず、教師の指示を仰ぐ学生が大半です。スピーチコンテストでは、あらかじめ決まった課題と 10 分前に課題が発表される即席スピーチの二つがあったのですが、後者は悲惨でした。課題は「洗濯」でしたが、多くの学生が母親との思い出を語り出したため、良い点をもらえませんでした。ここは新しい発想で、人と違うことを語らなければならなかったのです。

結局、画一的な教育からは、一定の水準は保つことができても、オリジナリティやイノベーションは生まれないという当たり前の結果に、いま中国の教育界は直面しています。早稲田では野放しが基本なので、駄目な学生が多いかわりに、少数の優秀な学生も育っています。人が立派に成長していくにはどのようにすれば良いのか、教員はどのような手助けができるのか、中国でも試行錯誤する日々が続いています。

よくある質問

森　由利亜

「あなたは道教を信じているのですか？」中国で、道教の研究をしていると自己紹介すると、時々こう質問されることがある。そう質問するのは道教研究者ではなく、大学の学部生や廟にお参りに来ている参拝客といった、普通の人たちである。私は道教信徒ではないし、信心と研究とは全く別物と考えているので、「信じているわけではありません」と言えば一言ですみそうなものであるが、それでも道教や道教信徒に自然な敬意や親しみを感じているうえに、「信じていない」という否定形の答えが実際のところ何を否定してしまうのかはかりかねるということもあり、いつも歯切れの悪い答え方になってしまう。

数年前、中国のある道観（道教の修道院）で一人の若い道教修行者から同じ質問をされた時もつい狼狽して、答えにならない答えをした上に、「あなたは道教を信じているのですよね」と、苦し紛れの変な質問をしてしまった。それは東日本大震災の数年前の夏、南京からほど近い道教の霊山にある女性道士（道姑・タオクー）たちのための道観をたずねたときのことである。夕方、山の中腹にあるその道観から、明るい谷を隔てて正面に展開する霊山の山並みをながめて涼んでいると、後ろから一人の道姑に声をかけられた。見た様子では十代半ばから後半くらいの女性で、出家者の道服を着ているが、その目は外国から来た客人に対する子供らしい好奇心で生き生きと輝いている。私の愚問にがっかりする様子もなく、彼女はこう言った。「天地就是我的父母」――天地がわたしの両親です。

あるいは、彼女がこの言葉を発するまでに、私たちは何か別のことを少し話したのかもしれない。この言葉が一字一句この通りだったわけでもないかもしれない。細かい部分をあまり覚えていない。しかし、その言葉の意味する所は以上のようなものだった。同じ日の昼に、私は年長の女性道士からこの道観では実の親から棄てられた女児たちを引き取って育ててもいるという事情をきいていた。若い修行者の言葉を聴いたときに、あるいはこの子もそのなかの一人なのかもしれないと思い、それが忘れがたい印象を残したのである。

その言葉を聴いた当座は、もしかしたら自分は彼女自身に関わる大事な話を聴いたのかもしれないという感覚に主としてとらわれたように思うが、そ

の旅行の後、その言葉を反芻するうちに、次第にそこには自分にとって道教を考える上での示唆的な何かが含まれているような気がしてきた。もっとも、彼女が発した言葉に、道教についての何か一般的なメッセージがこめられていると考えるとすれば、それは早計の謗りを免れないかもしれない。人を産み育む存在として天地と父母とを並び称することは中国文化の一般的な傾向ともいえ、天地を父母であるとする考え方は道教に特殊なものとは言えないであろう。また、細かいことを言えば、道教では万物を生み出すのは「道」であって、天地ではない。天地はあくまで道の規範性を体現するメタファーでしかないのである。そもそも、その修行者がどういう意図でその言葉を発したのかも、結局はわからない。彼女の実際の身の上も私は知らない。

だからこれはあくまでも私の感覚の問題でしかないのだが、細かい理屈は抜きにして、その言葉を聴いて私は、少なくともその修行者にとって道教が信じるに値するものであるということを、何の留保も無く納得できたように感じたのである。「そうか、彼女のお父さんお母さんは天地なんだ」という納得は、そういう納得だった。このことが果たして自分の研究の上に何らかの帰結とともに顕在化するのか、道教を考えて行く上での視点の変化につながるのかどうか、自分でもまだよくわからない。道教を考えてゆくための、自分にとっての新しい足場のようなものが渡されたような気がするが、それはまだ後になってみないとわからない。ただ現状で言えることがあるとすれば、その言葉について考えるようになってから、道教は私にとってそれまで以上に真実さの度合いを増したということである。それまで以上に、道教を研究していてよかったなあ、と素直に感じるようになったということである。さらに、そこには研究ということとはまた別の、やはり大事な何かが含まれているような感じがある。実際にその時になってみないとわからないかもしれないが、いつかまた誰かに「あなたは道教を信じているのですか？」と問われたときに、自分はそれに答えるのがますます難しくなっているのではないかという予感がするのである。

留学体験記

―University College Dublin―

渡邊　ちひろ

私は、大学に入る前からどこかの国に留学することに興味がありました。そして早稲田大学に入学後、「もし留学するなら自分は長期でヨーロッパの、英語を学べる大学に留学したいが、ちゃんと 4 年で卒業したい」と考え、その条件に合う大学を探して、アイルランドの首都ダブリンにある University College Dublin に半年留学することになりました。

私は、多くの留学希望の早大生が選ぶ、「英語で学ぶ」プログラムではなく、英語をもっと上手に話せるようになりたかったので、「英語を学ぶ」プログラムを選びました。そのため、アイルランドの大学には通っていたのですが、授業を受けていたのは、大学の語学センターのような施設でした。授業は 1 コマ 110 分で、1 日 2 コマ、月曜から金曜まで毎日 9 時から授業が始まります。前半のコマは、学術的な内容（文法やリスニング、ライティング中心）、後半のコマは実践的な内容（スピーキングやディスカッションなど）の授業でした。さまざまな国から学生が来ており、中国、台湾、韓国、スペイン、イタリア、ブラジル、クウェート、サウジアラビアと、とても多国籍でした。

留学中の生活面ですが、私が選んだプログラムでは、ホームステイの制度をとっていました。ホームステイ先のホストファミリーの人がいい人で、私は不自由なく暮らせましたが、人によっては、自分のホームステイ先に対して不満に思い、ホームステイ先を変えてもらうよう申請している人もいました。数人から聞いた話によると、ホームステイ先を変えてもらうと、1 つ目のホームステイ先より良くなるらしいので、不満に思うことがあったら迷わずに変えてもらうのがよいと思いました。

学期が、9 月～11 月末と 1 月～3 月末と大きく 2 つに分かれており、冬休みが 1 ヶ月以上あったので、その間にヨーロッパ諸国を旅行したのが留学生活で一番印象に残っています。楽しいことはとてもたくさんありましたが、大変だったこともありました。

これから述べることについては、留学を考えている方には気をつけてほしいと思います。まず外国に滞在する際は、しっかりとその国または地域のことについて調べておく必要があると本当に痛感しました。ダブリンでは、主な交通機関がバスでした。グーグルマップではなく、バス専用のアプリケー

ションを使うしかバスの情報が得られず、またバスそのものも時刻表どおりではなく、いつも遅れてくるか、3 本連続で来るなど予測不可能でした。

また、一人旅で行ったスペインで、グーグルマップで出てきたはずのバスがなく、タクシーで宿まで帰らねばならない時がありました。ここで次に気をつけてほしいのは、英語が公用語でない国では意外と英語は通じない、ということです（私は計 9 つのヨーロッパの国に行きましたが、公用語が英語でない国もたくさんありました）。私はその時、スペイン人のタクシードライバーに、乗せてもらえないか英語でしつこく話しましたが全然通じず、運良く近くにいたスペイン人の方に通訳してもらってやっと乗ることができました。また、それが夜の 22 時くらいで、慣れない土地に行く時は、時間に余裕を持って行動した方が本当に良いと思いました。

最後に気をつけてほしいことは、日本と違って、シャワーから温かいお湯が出ないことがしばしばある、ということです。冬の寒い時にずっと冷たい状態のままシャワーを浴びることも数回ありました。ホームステイ先ならともかく、旅行先だとそういう点に対応してもらうのが難しいと思うので、口コミを見るなどして、どういう宿なのか下調べをしておくのが大切です。

これらはささいなことのようですが、意外とストレスになるのでしっかりと覚えておいて欲しいな、と思います。とは言え、留学生活は総じて楽しいものなので、そんなに身構える必要はないと思います。外国だと自分の個性を積極的に出すことに寛容的なので留学を通じて新たな自分を見つけることもできると思います。留学を考えている方は是非、前向きに留学を検討して、もし留学が決まったら、勉強だけでなく、楽しむことを忘れずに頑張ってください！　応援しています。　　（ユーラシア文化論ゼミ 3 年）

Creative Works Inspired by Classical Japanese Literature

For JCulP required courses, students were asked to respond creatively to several representative works of classical Japanese literature. Here are some excerpted passages from what the students came up with.

JS = Japanese Student
OS = Overseas Student

Shoko Kurokawa (JS)

Inspired by *The Pillow Book*（枕草子）

春は桜見。はらはら散りゆく花びら、少し切なく、枝におりる鶯らの声が明るく響きわたる。

夏は海辺。日没のころはさらなり、白昼もなほ、人の多くにぎわひたる。また、身内や馴染など、和気藹藹と時をすごすのもをかし。独りで物思いにふけるのもをかし。

秋は食い気。暑さがうせて実りの近うなりたるに、獲れたての米、野菜、果実、魚がたらふくあるとて、三つ四つ、四つ五つなど貪欲に食をそそるのがあはれなり。まいて食卓におかずなどの連ねたるが、いと仰山あるのを見ゆるは、いとをかし。食べ果てて、腹が満杯になるなど、はた言ふべきにあらず。

冬は家で団欒。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、庭のいと白きも、またさらでもいと寒きに、暖炉など急ぎ起こして、毛布持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ゆるくゆるびもていけば、庭の霜や雪だるまも溶けて水がちになりてわろし。

Risa Tomioka (OS)

Inspired by *The Pillow Book*（枕草子）

Things that are unpleasant:

Walking along the narrow road to the station that is shared between cars, bicycles, and pedestrians. Getting off the morning commute train to let others off at their stop, only to fail at getting back onto the crowded train car before the doors close. Looking at the weather forecast app on my iphone in the morning and leaving the house with an expectation of clear skies. But later feeling cold and regretting to bring my clear combini umbrella.

Things that are pleasant:

The pink and white carnations in full bloom planted in my neighbor's yard. Sipping a cup of coffee in a cafe while escaping the world through a good book. Finding my favorite ice cream in the freezer section of the supermarket for 40 percent off. Getting in the bathtub after a long day. An empty train car.

Kana Hozoji (JS)

Inspired by *The Pillow Book*（枕草子）

People protest that the beauty inside is what is most important. But if this is true that beauty is only in the inside, why do people spend enormous amounts of time and money on outer beauty? This is because people will not even look at one's inner beauty if they are not beautiful on the outside. If the flower of an azalea was grotesque and unsightly, people would not notice the sweet taste of the stem. The beautiful bright pink petals are what tempted the people to touch it and bring it close to their mouth. This is no different for humans too. But for those who notice inner beauty without outer beauty, they are the lucky ones.

The cool mornings of an autumn day. No signs of sunshine yet, with thick clouds covering the sky. The countdown starts. The sun will shine in a couple of hours, reminding us that summer is not over. The first day of school, every first of September. Excited and nervous, greeting friends that came back eager to share their stories of the summer. The fresh crisp air always special that day.

Siwei Mirabelle Long (OS)

Inspired by *Essays in Idleness*（徒然草）

Possessing a great interest towards nature fills up our heart. That social media doesn't.

Hiking or simply taking a walk around in the neighborhood, either in the morning or in the evening, is pleasant. Sun rises rather early the whole year in Tokyo, and that makes every invitation for you to take a fresh breath-in and give away your pressure. It doesn't have to be pushing yourself early enough to witness sun rise, that goes too stressful, but easily just to gain satisfaction through brightness and tender breeze, like a mother, murmuring and whispering through your hair, your breath and your light sweat: you would be surprised of how your body would react to such pleasure. When you make up your mind on your way back from work or study, once you jump off a train and walk outside the station, the magical light around you entangling with clouds, sometimes pink or orange, others red or purple... you would be amazed by how colourful and capriciously these creatures are. The temperature would not be such a problem, late afternoons or early evenings tend to be milder than the hottest or coldest moment of the day. You don't need to shout out your feeling or share them to anyone: the best out of all these is for you to grinning at your day when you are taking a solo-walk, perhaps a few soliloquies battling with yourself... those who walk past you matter not, you are enjoying life.

I have special preference towards sky, nights not too starry are preferred. Moon eclipses are the most joy. The best part to enjoy this beauty is you can never capture them through your digital camera, not with techniques or professional equipment. Darkness is your friend, and no one brags about friends. Nights are mysterious, and when you see stars and planets moving around, hanging out with atmosphere to have you witness a show of hide-and-seek... you are an audience, in the theatre of globe, entertained by all creatures when the act of your life starts.

Life is entertaining. And your life belongs to nature.

Kanon Kimura (JS)

Channeling the Buddhist notion of reincarnation, but inspired by the poems of William Wordsworth, Lawrence Ferlinghetti and Walt Whitman.

I Crushed to Kill a Mosquito

Now;

A dead mosquito is on my hand.
A whole life of it is on my hand.
Parents of it is on my hand.
Ancestors of it are on my hand.
The time they lived for generations is on my hand.
Blood they sucked is on my hand.
People who were sucked are on my hand.
Creatures eaten by the people are on my hand.
The whole lives of the creatures are on my hand.
The origin of life is on my hand.
The origin of nature is on my hand.
The cosmos is on my hand.
Around the universe,
I see a tiny mosquito is flying freely.

A crushed tiny mosquito,
A tiny crushed universe,
Is on my hand.
Dried blood of mine
Is sticking

On my hand.

Extracurricular & Volunteer Activities

International House:
"Shakuhachi Meets Flute/Piccolo" (April 26, 2018)

Risa Tomioka (OS)

Some of us JCulP students got the chance to experience a shakuhachi and flute concert at the International House. Walking into the venue, I felt excited but completely in the dark about what to expect. While I've enjoyed orchestral performances in the past, I'd never held a particular interest in the flute, nor was I familiar with shakuhachi music. So I never would have guessed that I'd be completely drawn into Trond Magne Brekka's engaging performance.

The first song was a classical Japanese piece played fully on the shakuhachi, which Brekka latter revealed was the first time he ever played the instrument for an audience. He explained how a musician has full control of the sounds they can produce on the shakuhachi, which allows for unlimited possibilities, but requires extreme discipline. While listening to the signature techniques involving subtle shifts in pitch and tone, I felt transported to medieval Japan. It was hard to believe that in reality, a Norwegian flutist/piccoloist was recreating these ancient Japanese melodies in front of an audience for the first time.

However, what shocked me the most was a piece called Voice composed by Toru Takemitsu. While this song is played on the flute, it makes use of the techniques used with shakuhachi and other traditional Japanese instruments. Additionally, these techniques were paired with spoken word, singing while playing, and other vocal elements, making for a dynamic performance. I was completely unaware that all of these unusual techniques were allowed in a flute solo, or that they would make for such a fresh and almost futuristic sound. It made me realize that, in order to create something new and compelling, not only do we need the courage to explore the unconventional and unexplored, but it is also just as valuable to look to the past for inspiration.

Learning by Teaching: Hawaii Project

JeongHoon Lee (OS)

"Hawaii Project" is a student volunteer club at Waseda that visits the charter Volcano School in Volcano Village, Hawaii, twice yearly. My JCulP classmate Manoa Yamaguchi recruited me to join this club. I was part of the volunteer project to teach Japanese culture to the Volcano School students for two weeks during spring break. Since I researched the relationship between the 1954 Godzilla film and the atomic bomb in JCulP's Kiso Enshu class, I decided to teach this subject. I aimed not only to introduce Godzilla as a Japanese pop icon, but also to help my students understand about the terrors of the atomic bomb and about peace.

While teaching about Japanese culture, I also tried to learn about the students' culture and background. I learned that the charter school education had a goal to help students understand Hawaiian culture and heritage. I was amazed to hear my students confidently sharing their culture and their life in Volcano Village. Another volunteer club member talked about the 2020 Olympics, and expressed concern about how most Japanese people aren't familiar with or confident sharing their own traditional culture. In JCulP, I want to learn more about Japanese culture, especially literature and film, so that I can confidently share Japanese culture with foreign visitors. This summer, I will be a project leader for our next visit, and I hope to do my best.

For more information, visit: https://hawaiipjaloha.wixsite.com/hawaii-pj

Seminar Excursions

International House: "Two Singular Voices:
Barry Yourgrau and Kawakami Mieko in Conversation"
(April 16, 2018)

Nanako Terada (JS)

At International House with Ms. Kawakami Mieko

As an excursion for Professor Yoshio's "Contemporary Japanese Fiction in English Translation" seminar, we visited the International House of Japan to attend an event with the American writer Mr. Barry Yourgrau and the Japanese writer Ms. Mieko Kawakami. What first caught my interest was that even though the two authors have different nationalities and spoke in different languages, it seemed as though there was no barrier between them as they shared their opinions on various topics. As I listened to the authors read their books aloud and to their conversation, I began to wonder if the author's "voice" is not something that has shape and is describable, but is something that hides in the mind that the authors themselves have to look for when writing the stories. It also made me wonder about the responsibility of the translator, whose is expected to translate and capture the voice as accurately as possible. At the same time, I find it interesting to look into how translations differ from the original, opening the stories to different perspectives and interpretations.

Visiting the Theatre Museum (April 23, 2018)

Saki Matsumoto (JS)

We visited the Tsubouchi Memorial Theatre Museum at Waseda as an excursion for Professor Takai's "Japan's Living Theater" seminar. The painting of onna kabuki (female kabuki) illustrates the theater as a temporary structure, and the audiences were enjoying the performance casually as part of their lives. I saw a model of a more recent, permanent theater, and I could imagine what the views of the different seats and the classes of the audience members would have been. The museum also had a place where visitors can put on noh masks. Surprisingly, when I put on the mask, I was hardly able to see. I learned that it is impossible for the actors to see who is next to you, the floor you stand on, and the audience, so they have to rely on other senses to perform. The mask is smaller than the face, and is mostly flat, so it feels like your face is smashed into you, and it was difficult to breathe. It is as if the actors disappear behind the masks to allow more room for the audience's imagination. It was truly an "a picture is worth a thousand words" experience.

For more information on the JCulP experience, please visit:

How are Classes at JCulP?

[English] https://www.waseda.jp/flas/cms/news-en/2018/06/07/5287/

[日本語] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/07/5279/

Life as a JCulP Overseas Student

[English]https://www.waseda.jp/flas/cms/news-en/2018/06/07/5274/

[日本語] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/04/5241/

WASEDASAI: A Mini-Crisis That Brought Us Together

[English] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/12/5306/

[日本語] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/12/5303/

Summer Session Q&A

[日本語] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/12/5298/

What Makes JCulP Unique? (Faculty Interview)

[English] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/12/5315/

[日本語] https://www.waseda.jp/flas/cms/news/2018/06/12/5309/

論系室だより

33 号館 9 階にある多元文化論系室は、東京の東側が一望できる素晴らしいロケーションとなっているだけでなく、皆さんの学習をお手伝いする様々な制度･設備が整えられています。ここではそれらについて簡単に説明します。

制度編：Learning Assistants（LA）

2017 年度より設置された LA 制度は、論系室に大学院生が常駐し、学生の皆さんの日々の学習やレポート、ゼミ論、卒研の執筆をサポートすることを目的としたものです。多元文化論系という論系で学ぶ学生の興味関心が実に多様であることを受け、LA の大学院生の専門も文学、史学、哲学、表象関係と多彩なものとなっています。大学での学習についての疑問から留学、大学院進学の相談まで、幅広く学生の皆さんのお役に立てるはずです。LA の勤務表については、論系室の扉に掲示してありますので、ぜひご確認ください。

設備編：パソコン（Windows 3 台、Mac 1 台）、プリンタ、コピー、スキャナ、書籍、DVD

これらは、ゼミや演習でのレジュメの作成、レポートの作成、ウェブ上での諸手続き等様々な目的で利用できます。また、電源や作業スペースも十分にあるので、自分の PC で作業することもできます。

論系室の利用について気になることがあれば、常駐のスタッフにお気軽にお尋ね下さい。

論系室スタッフ：佐藤晃、日尾野裕一（文責）、山﨑薫

2018 年度　多元文化学会　春期大会　シンポジウム

ルイス・フロイスの時代と東アジア

フロイス史料研究事始

伊川　健二（早稲田大学文学学術院・教授）

ルイス・フロイスは、その著作『日本史』や『ヨーロッパ文化と日本文化（日欧文化比較）』などの知名度に比して、史料論的な整理は進んでおらず、研究環境が整備されているとはいいがたい。本報告では、その現状と主要な著作を概観することでフロイス研究の課題を探る。

大友親家の受洗に関する一考察

小澤　奈那（早稲田大学大学院文学研究科・修士課程）

大友宗麟の次男である大友親家の受洗の背景をみることで、当時キリスト教がどのように捉えられていたのかを考察する。

フロイス『日本史』の史料的価値―天文・永禄年間の事例を中心に―

岡本　真（東京大学史料編纂所・助教）

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの執筆した『日本史』は、今日、日本キリスト教史研究のみならず、織豊期研究にも幅広く利用されている。

ただし、これまでの研究では、主として織田信長・豊臣秀吉といった著名な人物や、大友宗麟ら主として九州のキリシタン大名との関連から援用されることが多かった。

そこで本報告では、天文・永禄年間における、従来あまり言及されてこなかった、商人などにかかわる事例をもとに、その史料的価値を論じる。

多元文化論系ニューズレターの第 1 号をお送りします。今年度は JCulP の第 1 期生が多元文化論系に進級という節目にあたります。授業などの公的な場面以外でも、教員と学生のあいだでより広い交流が行なわれる助けとなれば幸いです。とくに第 1 号では、JCulP の特集号として、JCulP の学生のみなさんに英文の記事をお願いしました。多元文化論系の新しい試みとして、JCulP の展開する授業内容にも広く興味を持ってもらい、履修の参考にしていただければ幸いです。　（源）

多元文化論系　ニューズレター　第 1 号

2018 年 6 月 25 日　発行

編集代表　源　貴志

発　　行　早稲田大学　文化構想学部　多元文化論系

印　　刷　株式会社　正文社